

巻頭言

新発田市でのイベント参加を通じた 「地域の教育・地域で教育・地域による教育」の実践

長 坂 康 代

2019年7月、30年以上続く歴史ある新発田のイベント「サマーフェスティバル」に本学から8団体が出店した。本学の学生がバイリンガルスタッフとしても参加し、総勢50名を超える学生が、出店やボランティアのスタッフとして新発田の街に出た。

当日の参加だけでなく、3月からほぼ毎週開かれる実行委員会の運営会議に、4年生2名もオブザーバーとして出席した。運営会議の出席に関して実行委員側から話をいただいたとき、学生が迷惑をかけると躊躇したが、それは杞憂であった。

実行委員たちの白熱する議論の場に同席した彼らは、毎回圧倒されて勉強になると意気込んだ。実行委員は彼らに「実行委員と本学をつなぐ役割」を与え、出店に関する本学への情報伝達、準備や片付けの学生ボランティア管理についても託してくれた。学生が地域をつなぐメディエーターとして活躍する姿は、学内での3回の打ち合わせ開催、教職員や出店代表者との連絡、当日の「敬和ブース」出店の見守り、学生のボランティアの差配、終了後のゴミ収集など、あらゆる場面で見とることができた。

サマーフェスティバル実行委員会の計らいで、今年度初めて出店した7団体に関しては「敬和ブース」を設けてもらうことになった。おかげで、学生たちは物怖じせず、のびのびと参加できた。担当した教職員が学生の自主性を尊重し、学生は自分たちで考えて行動していたが、その活動的な様子に驚かされた。学生に任せることで、遠回りや思わぬ些細な失敗もあったが、どの出店ブースの学生も晴れやかな顔をしていたことが印象的であった。

すべてに共通しているのは、学内での日頃の活動を地域で展開していることである。

報告1では、本学を支える地域組織オレンジ会の寄付講座「地域学」で学んだことを地域で展開した。サマーフェスティバル参加の経緯と、受講学生が中心となって、紆余曲折しながらも本学オリジナル手ぬぐいの企画から当日の販売までを記録した内容である。

報告2では、学生支援センターのソーシャルワーカーと医務室の保健師が企画する「寮飯会」を展開し、バランス良い食生活を意識してほしいと「野菜ディップ」を販売した活動である。この出店に至るまでの地道な活動が結実したといっても過言ではない。

報告3は、「地域で英語を使う」授業を地域で展開して、受講学生が海外からの団体の英語ボランティアをしたことの報告である。当日のボランティア活動はさることながら、手ぬぐい企画と連動して、手ぬぐい販売のための英訳をした、こうした枠を越えた取り組

みは、今後の地域活動の参考になる。

報告4は、昨年度から始めたイスラームの食文化についてモスクやインド・パキスタン料理店で学んだことを地域で展開したゼミ活動である。これまではイスラームコミュニティに学生が入っていたが、そのイスラーム文化を地域に持ち込む試みであった。

報告5は、主濱ゼミの方向性の決め手となった活動報告である。特にタピオカ販売は好評で、隣の我がゼミのハラル紅茶の存在がより薄く感じたほどである。この出店経験を活かして、さっそく次の地域活動につなげたように、思いきって地域に出て得たものは大きい。

報告6は、「LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign」の地域での展開である。学生がドラッグ・クイーンとして商店街を歩いたり、ネイル体験の出店をしたりした。Keiwa-signの企画にゴーサインを出した実行委員の英断もあつての出店だったが、これで地域での活動の幅が広がった。

報告7は、ボランティア活動に熱心に取り組む Keiwa HOPE である。本学でボランティア精神が築かれてきた歴史や KeiwaHOPE について詳細に記している。出店3回目で他と離れた場所であったが、先鋭の学生による体制が整っており、着実に目的を果たすことができた。

日頃の学内活動を地域で展開するからこそ、学生が袴を着ることなく、等身大でいることができる。まさに、地に足のついた実質的な学生教育である。今回つかず離れずの姿勢で学生と関わった教職員も地域で「育てる」ことに気づかされ、「地域とともに」の教育が多様なかたちで可能であると実感した。そのような観点からも、この7報告は、地域連携を通した真の教育のあり方について再考する、意義ある内容であるといえる。

最後になるが、学生を快く受け入れてくださり、教職員にも学びや気づきの場面を与えてくださった「しばたサマーフェスティバル 2019」の浮島丈宣実行委員長はじめ実行委員の方々には、この場を借りして厚くお礼申し上げます。